

① 敬語表現の使われ方

片桐須美子

先行の女性の話しことばにおける共同研究、「敬語表現の使われ方」（『ことば10号』）との比較検討を試みたい。分析方法はこれに準じ、美化語を除く、所謂狭義の敬語表現を取りあげる。但し、談話総数に関しては次のようにした。上掲の論において談話総数はインタビュー어의質問に対する答えの部分の一つの単位として数えられ、一談話中には複数の文が含まれていたがここでは一文を一単位として数える。従って＜談話数＞＝＜文数＞となる。これは、インタビュー어의質問の仕方及びそれに対するゲストの応答に個性が色濃く反映し一談話中の文数に著しく影響を与えている点を考慮した。

＜表1＞によると、女性ゲストの談話において尊敬表現、謙讓表現の少なさが指摘されていたのと同様に、全般に男性ゲストの尊敬表現、謙讓表現の使用例が少い。表現数が10を越す3例は、話題の内容、ゲストの社会的立場という点が影響を与えたものと考えられる。則ち、尊敬表現が13例挙がっているK6のケースにおいては、ゲストが戦前の学校の卒業式に歌われた歌を発掘した苦勞談を語る中で、世話になった人々に対し尊敬表現を用いている。これは話題の中心となっているゲストの成果に対して、それをあげさせることに貢献した人々である訳で当然敬意の念が払われよう。また尊敬表現が10例挙がっているT10のケースにおいては、話題に同業の先輩格にあたる人物がしばしば登場することに起因する。T3のケースは、尊敬表現、謙讓表現共に全ケース中最高の出現率を示し、特に謙讓表現は傑出した数値となっている。このケースは、20代であるゲストが交通事故を起こし人を死亡させてしまった為に社会的制裁を受ける立場にあった。その為、自ずと自身に関しては謙讓表現を、他者に対しては尊敬表現を多用する結果となっている。このことはインタビュー어의敬語使用にも甚だしい影響を与えている。これは、事故以前よりゲストと知己であったインタビュー어に、ゲストの側に立つ意識が働いたものと思われる。なお、＜表1＞中の各敬語表現の使用数の右列の百分比は、談話総数に占めるその敬語表現の割合である。従って一談

<表1>

ケース	ゲ ス ト							インタビュアー				
	談話 総数	尊敬 表現		謙 讓 表現		丁 寧 表現		談話 総数	尊敬 表現		謙 讓 表現	
K 1	96	2	(%) 2.1	5	(%) 5.2	71	(%) 74.0	85	5	(%) 5.9	2	(%) 2.4
K 2	94	4	4.3	0	0	67	71.3	91	5	5.5	6	6.6
K 3	123	0	0	0	0	97	78.9	54	0	0	5	9.3
K 4	47	0	0	3	6.4	48	102.1	23	1	4.3	1	4.3
K 5	72	0	0	2	2.8	67	93.1	53	3	5.7	3	5.7
K 6	108	13	12.0	2	1.9	85	78.7	90	12	13.3	2	2.2
K 7	58	2	3.4	4	6.9	45	77.6	24	5	20.8	0	0
K 8	150	3	2.0	3	2.0	101	67.3	123	17	13.8	3	2.4
小計	748	24	3.2	19	2.5	581	77.7	543	48	8.8	22	4.1
T 1	125	0	0	1	0	87	69.6	169	34	20.1	4	2.4
T 2	90	0	0	0	0	71	78.9	64	13	20.3	0	0
T 3	70	12	17.1	8	11.4	48	68.6	47	47	100.0	4	8.5
T 4	95	0	0	0	0	78	82.1	64	10	15.6	3	4.7
T 5	144	2	1.4	6	4.2	95	66.0	124	45	36.3	2	1.6
T 6	100	0	0	0	0	65	65.0	75	13	17.3	0	0
T 7	87	6	6.9	1	1.1	64	73.6	48	5	10.4	1	2.1
T 8	130	1	0	1	0	84	64.6	178	40	22.5	12	6.7
T 9	109	1	0	0	0	83	76.1	58	14	24.1	1	1.7
T 10	80	10	12.5	1	1.3	58	72.5	41	18	43.9	4	2.4
小計	1030	32	3.1	18	1.7	733	71.2	868	239	27.5	31	3.2
計	1778	56	3.1	37	2.1	1314	73.9	1411	287	20.3	53	3.6

話中に複数使用される場合、K 4 のゲストの丁寧表現の例の様に、100 %を越すものもでてくる。厳密な意味において使用率として見做すのには問題があるが、ここでは敬語使用の一つの目安として出現率と呼んで参考としたい。

インタビュアーの敬語使用については、K グループと T グループとで著しい差異が認められる。これは、K グループは訓練を受けたアナウンサーが無駄の無い質問を発しているのに対し、T グループはインタビュアーの個性を売り物とした番組であるということを背景にしてゲストへの発問のみならず私見を多くさし挟むということに起因すると考えられる。インタビュアーの発問の仕方如何に抛ってゲストの応答も変わってくるであろうことも予想されるが、例数及び出現率で見る限り敬語使用上有意ある差異は読み取れない。ここでは、インタビュアーのゲストの応答に与える影響について顧慮しないこととする。この点に関しては、先行の女性ゲストの談話において指摘された、「インタビュアーである男性がゲストである自分に尊敬表現を用いながら話しかけるにも拘わらず、そのゲストの応対は、敬語表現抜きであることが多い」という点と通ずるものがあると思われる。則ち、ゲストの尊敬表現の使用数に影響を与える大きな要因となるものは、話題の内容や、例えば社会的立場といった、ゲスト個人の性、年齢以外の何らかの属性であり、インタビュアーの発問の仕方は殆ど影響を与えないと考えられる。

1. 尊敬表現

〈表 2〉はインタビュー中に用いられた尊敬表現を分類したものである。ここでは、女性の話しことばに認められた、インタビュアーとゲストの間における尊敬表現形式の種類の対照性というような点は読み取ることが出来ない。しかし、共通して言えることは、「一て(で)いらっしゃる」の形式が、一般的にゲストにおいてもインタビュアーにおいても多用されているという点、また、ゲストの尊敬表現は話題に上っている第三者に対して用いる例が多いことから、「一てくださる」の形式も少くないという点である。

T グループのインタビュアーの尊敬表現の用い方で目立っているのは、「お(一ご)〜になる」と「〜て(で)いらっしゃる」の多用である。この二例については、K グループにおいても最大の出現数を示しているが、それぞれのグループ

<表2>

尊敬表現の類型

表 現 形 式	ゲストの使用回数		インタビュアーの使用回数	
	K	T	K	T
お(ご)~になる	4	3	10	73
お~になられる				1
~(ら)れる	7	5	9	
~て(で)いらっしゃる	2	5	10	77
お(ご)~です(ございます)				7
お~い			2	4
~てくださる	5	3	1	5
お~くださる				1
~てください	1		4	
お~ください			1	
~なさい		1		
~なさる	1	1	6	19
いらっしゃる	2	8	2	27
おっしゃる	1	5	3	24
くださる	1	1		1
計	24	32	48	239
	56		287	

<表3>

	K グループ	T グループ
「お(ご)~になる」	1.8 (%)	8.4 (%)
「~て(で)いらっしゃる」	1.8	8.9

の談話総数より出現率を求めると、<表3>となり、やはりTグループのインタビュアー、則ち黒柳徹子個人の言葉遣いの特徴を示すものと言えるであろう。こ

のような尊敬表現の多用は、「目の前の相手を強く意識するため」(土屋信一「話す敬語と書く敬語」—『国文学』S・62・11)生ずるとも考えられるが、濫用されることに依って目の前に居る人物に対する敬意を表す尊敬語というよりもむしろ発話者としての品位を保つ、丁寧語・美化語としての性格を帯びてくるように思われる。先行の女性の話し言葉の調査結果によれば、ゲストの用例において、特に「お(ご)～になる」と「～て(で)いらっしゃる」が女性の話しことばを特徴づけるものとして多用されている訳ではない。従ってやはりここではインタビュー固有の言い回しを反映したものと思倣されよう。

＜表4＞はゲストのインタビュアーと第三者(話題の人物)に対する表現をまとめたものである。ここでは、女性の話しことばに見られた傾向と同じことが指摘できる。則ち、ゲストのインタビュアー(聞き手)に対する尊敬表現の用例が極めて少いこと(一線部・4例)、従ってインタビュアーがゲストに対し尊敬表現を頻繁に使用していることと対照的であるという点である。但し「女性の話し

＜表4＞ゲストのインタビュアーと第三者(話題の人物)に対する表現

尊 敬 表 現		ハ ダ カ
ケースK1	2 (敬安の女性) 先輩の先生	4 (敬安の女性) 旅で出会った人
K2	4 天皇、役者、 <u>視聴者(1)</u> 、インタビュアー(1)	24 歴史上の人物、研究者、日本の若者
K3	0	14 写真仲間、一般人、仲間の若者、警察官
K4	0	36 子供、大人、役所の人
K5	0	14 人間、母、女子大生、日本人
K6	12 大学の先生、 <u>同い年の人々</u> 、 <u>歌手</u> 、役所の人	12 同級生、下級生、 <u>同じ年の人</u> 、 <u>歌手</u> 先生
K7	2 <u>子供達</u> 、 <u>教え子</u>	8 <u>子供達</u> 、 <u>教え子</u> 、盲人、人
K8	3 映画関係者、 <u>インタビュアー(1)</u> 、 <u>事務局長</u>	4 <u>事務局長</u> 、一般人
T1	0	31 先生、バンド仲間、ファン、弟、知人
T2	0	24 後輩、弟、体操の選手
T3	12 医者、看護婦、警察官、副大統領の娘、被害者	0
T4	0	35 客、兄、役者、兄、父、母、先生、座長
T5	2 (<u>記者</u>) タレント	20 父母、(<u>記者</u>) 友人、同僚、先輩、 <u>インタビュアー(1)</u>
T6	0	7 友人、作家、医師、 <u>インタビュアー(1)</u>
T7	6 (<u>若い女性</u>)、 <u>視聴者(3)</u>	1 子供たち、(<u>女性</u>) 先生、 <u>インタビュアー(1)</u>
T8	1 役者	17 チュコ人、アニメ作家、中国人、日本人
T9	1 医者	2 演出家
T10	10 俳優、 <u>インタビュアー(2)</u>	26 俳優、進駐軍の外国人、課長、劇団仲間

ことばにおいて「おっしゃる」、「お～になる」などの尊敬の度合いが高い表現が第三者に対しては使われていたが、聞き手であるインタビュアーには使っていない」という点に関しては逆の結果を得た。則ち、ゲストのインタビュアーに対する尊敬表現の4例中、3例が「おっしゃる」（2例）、「お～になる」（1例）であった。これだけの少数例より結論は出せないが、少なくとも「女性の方が男性よりことばが丁寧であり敬語表現を好む」と一般的に言われる点に関して疑問が持たれる。

一方、女性の話しことばにおいてゲストがインタビュアーに対してハダカの表現を取る例は見られなかったが、ここでは3例（一線部）挙げられている。この例もまた少数の為、推測にとどめるが、このように男性ゲストは敬語の使い方に個人差が著しく、その多様さは女性ゲストに勝る可能性がある。但しマスメディアに拠る談話という特殊な範疇に於いての可能性であり、日常生活に於ける談話はこの限りではない。

また、第三者に対する尊敬表現の用い方についてであるが、○で示したように、同一人物に対し尊敬表現を使ったり使わなかったりの例も多く見られる。自分との関係が親しい場合にハダカの表現を用いるのは言うまでもないが、このような揺れが生ずるのは、密室における談話ではなく、視聴者の存在が前提となっていることに起因すると考えられる。目の前に居る相手（インタビュアー）と談話しながら、目の前には居ないがその談話を聞いている存在（視聴者）が時折意識に上ることから生ずるものと思われる。

＜表5＞にインタビュアーの尊敬表現がどんな対象に用いられているか、を示した。話題の内容が影響するのは言うまでもないがゲストとの親疎の度合いがゲストに対する尊敬表現の多少に大きな影響を与える為、同一のインタビュアーであるTグループのケースの中でも3～37例と表現数に幅がある。無論親疎の度合いというのは個人的な親交の有無も含まれようが、ここではゲスト自身が持つ属性や、ゲストの親しみやすさといったものが強く影響している。例えば尊敬表現が最も多く用いられたT3のゲストは、談話内容から察するに以前からの知己であり、しかもインタビュアーである自身よりかなり年少の若者であるのにも拘わらず、先に述べたゲストの置かれた特殊な社会的状況が強く働いている。また、

<表5>

インタビュアーの尊敬表現

尊敬される人	ゲスト	ゲストの身内	第三者	視聴者	そ の 他
ケース K 1	5				
K 2	3		1	1	
K 3					
K 4	1				
K 5	3				
K 6	9		3		
K 7	5				
K 8	16	1			
T 1	16	5			11 (ゲストを含む他の人)
T 2	6	4	2	1	
T 3	37		10		
T 4	3	6	1		
T 5	34	2	6	1	2 (ゲストを含む他の人)
T 6	12		1		
T 7	5				
T 8	30		2	8	
T 9	14				
T 10	12		6		

尊敬表現が使用される数の少ない T 4、T 5 のゲストは双方とも 40 代ではあるが、T 4 のゲストは庶民的大衆演劇役者であり、T 5 のゲストは自らが「堅くて合わない」と NHK を退職した理由をざっくばらんに語っており、いずれも構えない親しみやすい語り口である。しかしゲストとインタビュアーの間に個人的な親交があった形跡は認められない。

女性ゲストに対するインタビュアーの尊敬表現がゲスト及びゲストの身内に対して用いられることが多かったのに対し、ここではゲスト及び第三者に対して多

く用いられている。この点に関しては話題の中味にゲストの身内が殆ど登場しなかったこと、則ち話題内容に起因している。またゲストの年齢との関連性については、上述のT 3、T 4、T 5のケースからも窺うことができるが、関連性は認められない。

2. 謙譲表現

＜表1＞より、謙譲表現と尊敬表現の出現率を比較してみると、全般にゲストよりインタビュアーの方が出現率が高い。ゲスト、インタビュアーのいずれにおいても謙譲表現より尊敬表現の出現率が高いが、インタビュアーよりゲストの方が談話総数に占める謙譲表現の割合は高い。これはインタビューを受ける立場から、話題に自身が上ってくる確率の高いことから理解できる。また、KグループとTグループとで比較するとゲストについては謙譲表現及び尊敬表現のいずれもがわずかにTグループの方が少ないものの大差ない。一方インタビュアーについて見てみると、謙譲表現の出現率はTグループの方がやや低いが、尊敬表現は極端にTグループの方が高率で出現している。この点に関しては前項2.尊敬表現で述べた通り、Tグループのインタビュアーの言葉遣いの特徴を示している。また最初に述べた、インタビュアーの、ゲストの応答への影響の無さについて裏付ける結果ともなっている。

また、ここでも年齢と謙譲表現との関連性を認めることは出来ない。

具体的に使用された謙譲表現を示したのが＜表6＞である。用例の多いのは「お（ご）～いただく」、「～ていただく」、「～（さ）せていただく」、「お願いします」、「うかがう」であるが、「お（ご）～いただく」、「～ていただく」がインタビュアーに多いのと対照的に、「～（さ）せていただく」がゲストに多い。これはゲストが自身について語り、インタビュアーがそれを受けるという談話形式から察しがつく。但し細かく見てゆくとTグループとKグループとでは差異が認められる。「～（さ）せていただく」のゲストの使用例は10例中、9例がKグループに現れ、しかもKグループ内のある特定ケースに偏って出現しているのではない。Tグループにおける使用例が極端に少いのである。先に述べた通り、グループ全体で見た時の各表現の出現率に大差はないのであるが、具体的な表現の

<表 6>

謙譲表現の類型

表 現 形 式	ゲストの使用回数		インタビュアーの使用回数	
	K	T	K	T
お(ご)～いただく		2	2	5
～ていただく		3	6	7
～(さ)せていただく	9	1	1	
お(ご)～する(いたす)		2	1	
お願いする	4	3	1	1
うかがう		4	8	8
拝見する			1	3
申し上げる	1			2
いただく	1	3		
いたす	2		2	1
～てまいる	1			1
～てさしあげる	1			
お目にかける				3
計	19	18	22	31
	37		53	

使用を見ていくと、やはりインタビュアーとの呼応、則ちインタビュアーの影響を受けているように見受けられる。全体的に出現率をみると、ある形式を多用すれば他の形式の使用を抑えるということで釣り合いが取れている。

3. 丁寧表現

<表 1>にゲストの丁寧表現の表現数と出現率を示した。K 1～K 8、T 1～T 10は各々年齢順(若～老)に並んでいるのであるが、ここでもやはり年齢に拠

る差というものは認められない。この点に関しても女性ことばの先行研究の指摘にあった通りである。

また、談話全体のバランスからみて、尊敬表現・謙譲表現の出現率の低いケースにおいて、丁寧表現の出現率がやや高くなっている。則ちK 3、K 5、T 2、T 4、T 9においては尊敬表現及び謙譲表現が殆ど、もしくは全く使用されていないのに対して丁寧表現は比較的高率で出現している。一方、T 1、T 6、T 8は尊敬表現及び謙譲表現が殆ど使用されていないのであるが丁寧表現も少くはないものの決して多いとはいえない。これらのケースについてはゲスト個人の何らかの属性が強く働いたものと思われる。例えば、T 1のゲストはロックバンドのリーダーであり、形式的な表現に因わず、日常的な表現を使用している。またT 6のゲストは大手出版会社の社長であり、日常、人を使う立場にあって、インタビューというよりお喋り的要素の強いT グループのインタビュアーとの談話において敬語を使用する意識は働かなかったのではなかろうか。

全般に尊敬表現・謙譲表現の出現率が低いなかで、丁寧表現は平均しても7割以上の出現率を示し容易に使用され、発話者としての品位を保つのに用いられている。

4. まとめ

以上、男性ゲストの談話における敬語表現の使われ方を、主に女性の話しことばと比較検討して見てきた。結論として言えることは敬語使用の面での男女差は殆ど認められないということである。むしろ共通して指摘できる点が多かった。例えば、インタビュアーの敬語使用の多少が、ゲストの敬語使用の多少に影響を与えてはいない。という点、年齢による敬語使用の差異は認められないという点等である。女性の社会進出に伴い今後もこの傾向はますます顕著になっていくものと思われる。

また、丁寧語に敬語という意識が薄れているという報告がある（国立国語研究所報告77『敬語と敬語意識 — 岡崎における20年前との比較』三省堂1983年）が、敬語表現使用上特異な点の認められたT グループのインタビュアーの例から鑑みるに、美化語は勿論のこと丁寧語に敬語という意識が失なわれつつあるのに伴い、

従来尊敬語とされていた表現において相手に対する尊敬の念を表すという意識が失なわれ、むしろ発話者の品位を保つために使用するという例が出現しているように思われる。話し言葉に於いては尊敬語が濫用されがちではあるが、その結果本来意図していた筈の言葉の役割が変質してしまう恐れのあることを心得ていなければなるまい。